

バイエルン国立歌劇場が6年ぶりに日本に戻ってくる。この6年間で当歌劇場の注目度は益々高まったと言えよう。2013年、ケント・ナガノの後任として、その大役を任されるには未知な可能性を秘めたキリル・ペトレンコが音楽監督に就任した。実際「当初はその大きな飛躍に躊躇していた彼と何度も会って説得した」とニコラウス・バッハラー総裁は振り返る。そしてその2年後の2015年、ペトレンコが今度はベルリン・フィルの首席指揮者・芸術監督に選出された時の、期待を含む驚きは記憶に新しい。2019年にベルリン・フィルのポストに就任するペトレンコは、2020年までバイエルン国立歌劇場音楽総監督との兼務という重責を担う。

しかし当の本人は、メディア泣かせ、音楽業界泣かせな指揮者である。インタビューは一切受け付けず、バイエルン国立歌劇場が発行している冊子にすらコメントを載せさせてくれないと、劇場のプレス担当者が苦労話を漏らす。バッハラー総裁は「指揮者は言葉でなく、音楽で表現するという信念の現れ」と言ってペトレンコの姿勢に理解を示し、その信念をこれからも貫くつもりだというペトレンコに代わってインタビューに応じるほどだ。

録音に関してもお抱えのレーコーディングプロデューサーがいて、それでもその録音データを売り出す許可は減

多に下りないという。そんな中、ようやく市場に出たDVDがベルクの『ルル』だ。こうしてペトレンコの指揮やコメントは希少価値の高いものとなり、聴衆は彼の音楽を耳にしっかり焼き付け、そこから少しでも彼の人となりを汲み取ろうと必死になる。結果的には「音楽を通してのみ存在する、ある意味理想的指揮者」として認知され、また注目度が上がるのだろう。その在り方は、メディアが煽動する現在の音楽界へ警鐘を鳴らしているのかもしれない、と納得させられる。

しかしそこで感心して終わってはジャーナリスト業が成り立たない。今回は、劇場関係者の目を通して、ペトレンコ氏の実像に近付いてみたい。

ペトレンコとバッハラー総裁の出会いは20年前に遡る。当時ウィーン・フォルクスオーパー総裁だったバッハラー氏は、カペルマイスターのオーディションを受けたペトレンコに出会う。アシスタントとして練習を指揮した初日から、ペトレンコの卓越した才能は明白だったという。

その後ペトレンコは別の道を進んだが、バッハラー氏はペトレンコの歩みを常に視野に入れており、例えばペトレンコが1999年から2002年まで音楽監督を務めたマイニンゲン歌劇場で《ニーベルングの指環》を指揮したことにも注目していた。

Photo: Wilfried Hösl

中 東生

(在チューリッヒ、音楽ジャーナリスト)

キリル・ペトレンコ

音楽を通してのみ存在する





Photo: Wilfried Hölzl

こうしてカベルマイスターから地道に基礎を固め、着実に階段を昇って来たペトレンコはレパートリーも豊富になり、ちょうどバイロイト祝祭劇場で《ニーベルングの指環》を振る時期と重なったベストタイミングに、バイエルン国立歌劇場音楽監督として抜擢したと氏は説明する。

バッハラー氏の知る素顔のペトレンコは「非常に頭が良く、感情豊かでユーモラス」だという。指揮者としては「真面目で向上心に取り憑かれている」と評価する。バッハラー氏は、指揮者にとって最も重要なのは「明確な音楽的イメージを持ち、それを表現できる精度が高いこと」だと考えており、まさにペトレンコはそこが卓越しているのだという。しかしそれを実現させるには、自分のイメージを貫ける関係を、オーケストラと築ける「人徳」が必要だ。楽団員の目からペトレンコを見てみよう。

バイエルン国立管弦楽団には前身も含め、約500年の歴史がある。ワーグナーのオペラは全て、当時からの書き込みが残るオリジナル譜を使用している。そんな伝統に誇りを持つ彼らをも納得させた最大の要因は、ペトレンコのエネルギーだと、親子2代に渡り当楽団の第一ヴァイオリニストで、自主レーベルも兼ねるFARAOを運営しているガルガレ氏は語る。到達出来ないほどの高みを目指す完璧主義者で、同じ場所を20回くらい繰り返すこともあるが、彼の完璧な指揮法は、どこ

で何をどう弾けばいいか瞬時に理解させるのだという。

**現**代オペラ世界初演のオーケストラ付き舞台稽古に立ち会ったこともあるが、強靱な集中力で舞台上の歌手達とオーケストラ、演出チームと音響チームを引っ張り、2回の休憩時間も休むことなく作曲家と議論を続けるペトレンコは、職人肌のカリスマを放出させ続けていた。

**ま**た『タンホイザー』の合唱でも、子音捌きまで正確に指示する彼の指揮が日本でも見られると思うが、合唱指揮者は、ペトレンコが要求する言葉のリズムと子音捌きの精度が高いため、彼の指揮の時には特に神経質なほど練習に力を入れて稽古に臨むという。

こうして5月21日に初日を迎えた『タンホイザー』は、聴きながら自然に微笑んでしまうほど美しく、叙情的だ。ラフマニノフとマーラーのプログラムも6月5、6日連続で大成功を収めた。ソリストとは感情をぶつかり合わせ、交響曲では独壇で炸裂する凄まじさだ。

前出のFARAOには、このマーラーの交響曲第5番を二代前の音楽監督だったズピン・メータと録音したものがあって、聴き比べてみるとペトレンコが理解できるかもしれない。

## 理想的指揮者